令和２年度　No. 2

銀杏坂　～ 輝く薩摩中央 ～

令和２年５月28日（木）　読売新聞

本校の生物生産科果樹班が育てたナシ苗木の地元生産者への引き渡しの記事が，読売新聞に掲載されましたので紹介します。

高校生が育てたナシ苗木

さつま 農家に引き渡し

苗木を受け取った藤田さん（左）と、生物生産科の生徒

さつま町の薩摩中央高の生徒が育てたナシの苗木を町内の農家が購入し、27日、同高で引き渡し式が行われた。苗木は「ジョイント仕立て」と呼ばれる新しい栽培方法に用いるもの。受け取った農家は「とてもありがたい」と喜んだ。

ジョイント仕立ては神奈川県が開発した栽培方法で、ナシの苗木を約1・5～2㍍間隔に一列に並べて育て、苗木同士を接ぎ木して1本にする。樹木間を養分や水分が行き来するため、成長の促進が期待できるほか、作業の効率化が図れるという。

県内でもナシ栽培が盛んな霧島市や同町で導入の動きが広がっているが、農家が通常の作業に加えて専用の苗木を育てるのが難しく、導入に踏み切れないケースもあった。

地元の技術振興に寄与しようと、同高生物生産科は2018年12月からジョイント仕立て用の苗木の成育を開始。歴代の3年生らが管理を続け、今年までに必要な大きさに成長した。今回は町内で果樹栽培を営む藤田俊郎さん(69)が約50本を買い取り、果樹園に導入する。

引き渡し式では、3年の市山晴菜さん(17)が「先輩方が植えた苗木がここまで成長した。お渡しできてうれしい。後輩たちに引き継いでいきたい」とあいさつ。受け取った藤田さんは「自分で苗木を作るのは難しく、大変ありがたい。大切に育てたい」と話した。同高では今後も苗木の提供を続けていくという。